

【書評】

「暖簾の会計」

山内 暁 著

株式会社中央経済社

平成22年3月30日刊

暖簾は、企業買収の結果生じる。企業は成長のために、存続のために、時には社運を賭けて企業買収を行う。企業買収は企業の業績を大きく左右する場合がある。企業買収により生じた暖簾は、現行の我が国の会計基準のもとでは20年内の一定年数で償却され、一定の条件下において減損の対象となる。暖簾の償却年数や減損の要否も企業の業績を大きく左右する場合がある。そのような企業買収を目の当たりにし、企業結合に関連する会計処理や暖簾の会計処理に日常的に向かい合っている公認会計士に本書が役立つものであるかどうか期待と懐疑心を持ちながら読んだ。その結果は、本書は、十分に実務家の参考になるものであると感じた。確かに本書は、企業結合の会計処理や暖簾の減損を検討する際に横に置いて参考にするような、会計基準の解説書や会計処理の事例集ではない。しかしながら、本書の研究アプローチと研究成果は、実務家が実務を遂行するために必要である制度会計の背景を理解するために非常に役立つものであると考える。

本書は、「第 部 暖簾の概念的研究」と「第 部 暖簾の制度的研究」から構成されている。第 部では、無形財的暖簾観、超過利潤的暖簾観及び残余的暖簾観という歴史的に変遷する3つの暖簾観を整理・分析するとともに、現代における暖簾観であるシナジエ的暖簾観から3つの暖簾観を解釈することにより暖簾概念を明らかにし、筋の通った暖簾観の確立を試みている。第 部では、第 部で明らかにした暖簾概念をもとに、米国会計基準、国際財務報告基準（IFRS）、英国会計基準、我が国の会計基準などにおける暖簾会計の制度的背景を理論的に分析し解明を試みている。最近、新たに我が国の会計基準に取り入れられた段階取得の処理や負の暖簾の処理、さらには今後、国際財務報告基準（IFRS）への対応から必ず議論される少数株主持分相当分の暖簾や暖簾の償却・非償却まで多岐にわたる諸論点について、筋の通った暖簾観と制度会計が整合しているかどうかの視点から図表や仕訳を多用し分析しているため、著者の主張と制度会計の背景が非常に理解しやすくなっている。

この数年、会計基準はめまぐるしく変化しており、この変化は少なくとも当面は続くであろう。企業結合や暖簾の会計基準は、その最たるものであろう。大きな変化の中で、我々実務家は、新たな会計基準の字面のみ追いかけ実務に形を当てはめようとしてはいけないであろうか。変化の時こそ、筋の通った会計観を持ち、会計基準の制度的背景を理論的に理解しなければ、その実務に

おける適用方法を誤ってしまいかねない。特に近い将来、規則主義に基づく我が国の会計基準から原則主義に基づく国際財務報告基準（IFRS）に切り替わったとき、筋の通った会計観を持つことがより重要になる。本書の暖簾についての研究アプローチと研究成果は、変化に対応し得る実務能力の基礎を構築し強化するために、非常に役立つと考えられる。

以上のことから、協会学術賞に値するものとして選定した。